滋賀ラボ　大学×地域

滋賀大 堀口真理子特任講師
（特別支援教育）

読み書き障害 学習支援

学び方工夫、検査法確立目指す

長く伸ばした粘土をお好み焼き用のヘラで切り分け、「温度」や「応援」といった漢字の形を作る。大津市平津1丁目のNPO法人「滋賀大キッズカレッジ」では、繰り返し書いて覚えるのが一般的な漢字の習得に粘土を用いる。知的発達に遅れはないが、文字を読んだり書いたりするのに大きな困難がある「読み書き障害」のある小中学生に向けた学習の工夫だ。

キッズカレッジは2005年、滋賀大付属の教育実践総合センターでの教育相談を通じて得られた知見を地域に生かそうと、研究者や市民が設立。運営する学習室には現在、小学生から高校生までの約70人が月2回のペースで通う。教育学部の学生がボランティアをしたり、臨床経験を積んだりする場にもなっている。

読み書き障害は、注意欠陥多動性障害（ADHD）や高機能自閉症といった発達障害の一つで、学習障害ともいわれる。相談員の一人で、本年度は滋賀大で特任講師を務める堀口真理子さん（35）は「学校で最も見過ごされやすい隠れた障害」と指摘する。練習しても漢字が覚えられない、覚えてもすぐ忘れてしまう、文章をスラスラ音読できないといった特徴があるが、話し言葉の理解には問題がないだけに、学校では「頑張りが足りない」と評価されてしまいがちだという。

過去に巡回相談員として小学校を訪問していた時、授業中に立ち歩いて問題児とみられていた子どもや、音読ができず勉強が嫌いになっていた子どもの背景に障害があることに気付いた。授業や宿題で書く負担を減らしたり、個別に学習の時間を作ったりすることで意欲を取り戻す姿を見て、「安心と自尊心」が大切との思いを深めた。

学習室に通う児童生徒と接しながら、主に読み書き障害のアセスメント（検査）方法を研究している。「脳の中枢神経の機能障害」だと周囲の大人が早めに気付いて配慮することで、二次障害が防げると考える。

同大学の窪島務名誉教授との共同研究では、米国のアセスメント方法を日本語に置き換え、簡単な平仮名の60語を読む時間を計り、健常児と比較した。その結果、障害のある子どもの所要時間は2学年下の健常児とほぼ等しく、学年が上がっても改善しにくいことが分かった。

今後は読み書き障害の範囲を明確にし、小学1年の夏休み前などに実施できるような検査方法の確立を目指す。「障害のある子どもたちの本質はまじめでやさしく、頑張り屋なんです」　（岡本早苗）

＝原則として第4月曜に掲載します

読み書き障害のある子どもに粘土を使った漢字学習を指導する堀口さん。「自分で考えて分かる喜びを取り戻してほしい」と願う（大津市平津1丁目・NPO法人滋賀大キッズカレッジ）